学校通信　Ｒ５・２月号

中一小だより

中郷第一小学校
電話　４２－４０００
児童数４６７名

「A」ではなく「B」？　多面的に見る。

教頭　和田　真一

過去によく遅刻をする子どもを担任したことがあり、私はその子が遅刻するたびに「なぜ遅刻するの？」と理由を聞いていました。しかし、ある先輩から「原因を探る Why ではなく、改善策を探す How で対応したほうがいい」と助言されたことが強く印象に残ってます。つまり、質問を「なぜ遅刻するの？」から「どうしたら遅刻しないようになる？」と変えたほうが効果的だということです。そのときに、それまでの自分にはなかった「物事を多面的に見る」大切さを学んだ気がします。

「正解を教える」ではなく「質問を返す」

私たち大人は「先生、〇〇していいですか？」「お母さん、〇〇していい？」などと、子どもから質問を受けることが多々あります。そのとき多くの大人は、「いいですよ」などとすぐに正解を教えますが、時には「〇〇さんはどう思う？」と問い返してみることも必要なのかもしれません。ある企業が実施した「令和時代を生きる子どもに親が望むこと」というアンケートで、１番多かったのは「失敗しても立ち直り成長できること」でした。子どもからの質問に対して、大人がすぐに正解を与えてしまう今のような状況で、果たしてその力は身に付くでしょうか。子どもが自分で考え、判断し、行動し、成功や失敗を数多く経験してこそ、その力が身に付くと考えます。その意味でも、子どもからの質問に対しては、簡単に答えを教えるよりも、質問を返して思考を促す方が効果的だと思います。

「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」

私たち大人は、子どもが生まれたときには「生まれてきてくれてありがとう」と誕生を喜び、歩いたら喜び、言葉を話したら喜びと、子どもの成長に伴って些細なできることが増えるたびに手放しで喜んだはずです。ところが不思議なことに、いつの間にか大人は「ないものねだり」になってしまい、目の前の子どもと周囲の子どもを比較（比較対象とすべきは過去の自分では？）し始め、「〇〇の点数が悪かったから勉強させないと」と、あの手この手を考えるようになります。しかし、子どもは、「元気に挨拶ができる」「早寝早起きができる」「友達が多い」「掃除を一生懸命にやる」など、それぞれが多くの長所を備えています。私たち大人が子どもと接するときには、できないことや苦手なことに目を向ける「ないものねだり」ではなく、できることや得意なことに目を向ける「あるもの探し」をして、子どもの長所を大いに認めたり褒めたりしたいものです。

「子どもの評価」ではなく「自分の評価」

学習評価には、「子どもの学習状況を把握する」「教師の指導を振り返る」という二つの目的があります。特に、後者が重要で、目の前の子どもを見て「計算が苦手」「学習意欲が低い」「掃除をおろそかにする」という実態に気付いたならば、「〇〇ができない子」と子どもを評価するのではなく、私たち教師は自分の指導を振り返り、適宜改善する必要があります。このことは、教師と児童という関係のみならず、親子関係においても必要な視点だと思います。同じミスを繰り返す子どもがいたとすれば、「子どもに問題がある」と考えるのではなく、「これまでの自分の支援は適切だったか、子どもに伝わっていたか」と、矢印（ベクトル）を自分自身へ向け、自己評価することの方が大切だと思います。

人は年齢を重ねれば重ねるほど、経験を積めば積むほど、物事の捉え方や習慣が凝り固まり、柔軟性が失われていくような気がします。しかし、変化の激しい今の時代だからこそ、日頃から自分の言動を「本当にこれでいいのか？」と振り返り、物事を多面的に見ることを大切にしたいと思います。

２月行事予定

７日（火）：**弁当の日**　　21日（火）：**弁当の日**　　24日（金）：授業参観